広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	「生きる」、「住む」、「暮らす」動詞グループから見た類義語
Author(s)	ロジナ ナターリャ,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 18期 : 176 - 182
Issue Date	2004-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038864
Right	
Relation	

「生きる」、「住む」、「暮らす」動詞グループから見た類義語

ロジナ・ナターリャ

はじめに

言葉の裏に隠された意味というものは理解しにくいものである。動物の鳴き声の口調によって、意味が違っているように人間が口から出す言葉も特別な意味が入っている。言葉には多くの側面があり、日本語は他の言語に比べて、特別な読み方をする漢字、紛らわしい同音語などはもちろん、東洋の言葉に特有の擬態語、擬声語など、その数が特に多いと思う。

日本語を勉強していて、新しい単語を覚えても、その使い分けを完全に理解するのにかなり苦労するものだ。辞書で必要な言葉を引いてみると、必ずいくつかの言葉が出てきて、どの言葉が使いたい場面に一致するのか分からなくて戸惑う。

勉強している言葉、すなわち日本語で話しているうちに、自分から話したり、手で書いたりして、言葉に潜んでいる意味を正確に理解しているのか把握するつもりで、類義語を研究レポートのテーマにした。本レポートでは類義語の中でも「生きる」、「住む」、「暮らす」動詞グループの使い分けを扱うことにした。

動詞というものは基本的に広く使われているが、知らない部分も多いと気付いたのは日本語を鍛えようと小説にはまり始めたの頃のことである。語彙を増やすのなら、読書が語学の勉強にとても良い方法だと思ったのだ。日本語の小説を読んでいると、自分の母語と言葉の使い分けが一致することもあるのに、全く一致しないこともある。意外だったのだが、これらの相違点が日本語への関心を高め、興味深く感じさせ、このテーマを選ぶこととなった。

研究方法

本稿では、辞書で「生きる」動詞の用法を調べた後、考察し、まとめる。資料として、次の辞書類を参考にした。

・基本日本語–意味と使い方　角川辞典–川書店　森田良行　昭和５４年
・新明解　国語辞典　第一版　昭和　４８年
・新明解　国語辞典　第四刷

・新明解　国語辞典　第五刷
・大きな活字の国語辞典　第三版　三省堂　1982 年
・A dictionary　of basic Japanese　基本日本語辞典　角川書店　森田良行　平成１０年
・The　Great Japanese Dictionary 日本大辞典　第二版　講談社　梅棹忠夫・金田晴彦 1995 年

例としては身の回りに見聞きし、用法に一致している、していない文章をまとめた。どういった場合はどういった動詞を使うことが可能か不可能か、どういったニュアンスが入っているのかをネーテイブ　スピーカに聞き、得た結果を本稿にまとめた。

１.「生きる」の基本的な用法

辞書では、その編著者によって、解釈が違うのが当然である。意味がほとんど一緒だけれど、少し違うというものもある。「生きる」動詞の使い分けが元々決まっているのかもしれないが、これらの用法を調べるのは面白かった。

上記の辞書で動詞の用法を調べると、次ぎのようになった。

・生き物として自身の自律的な営みとして、休むことなく運動、吸収や活動を続けながら、この世で生存を保つ。

例文

a 人間が生きていくためには最も重要な器官、脳。

b 俺は今こうやって生きてるし、春江ちゃんもちゃんと生きてるし、それは間違いないことだろう。だからいつか必ず死ぬなんて、俺はそんなこと考えたくない。

c 家内が言っていることに従わないと、生きていけない。

・効力や機能を失わずにいる。有効である。価値が出る。そのものとしての働きが引き出される。役に立つ。実効がある。

例文

あなたのこれまでの苦労は、いつか必ず生きるでしょう

・現実に影響を与えている。生命のあるものとして存在する。死んだ者、失われたものが人の　心の中で命のあるもののように作用する。影響を残す。

例文

彼の精神は我々の心の中で生きています

・打ち込む。何かにすがる。ある物事に精魂を傾ける。生活の張りを何に見いだす。生き

甲斐を見い出す。

例文

１０年思い出に生きる

・生き生きとする。活気がある。実際に活動している。生命がこもっている。生命のもたないものに、命がふきこまれる。生じる。

例文

この小説では会話が特に生きている

・自分や家族が飢えないように、うまくやっていく。この世で暮らす。暮らしを立てる。生活する。

例文

二人で暮らすの、そうしたら、さあ、いつも一緒にいられるんじゃない？やっぱ、バラバラに生きたらさ、俺達弱いからダメになっていくんじゃない？

・うまく扱うことによって、そのものに備わっている機能、効用が一段と発揮される。命があるような動きをする。意味を持つ。

例文

野口英世の研究は今日なお生きている

・死なないで済む。死ぬことを免れる。死にそうな状態から逃れて助かる。死んだもの、死にかけたものが、命を取り戻す。よみがえる。蘇生する。

例文

肉体的に生きていたが、精神的にはもう亡くなっていた。

碁や野球でアウトにならないですむ。

２　動詞の語源

２．１「生きる」

以上のことから「生命を保つ」という点に注目し、「生きる」の字の語源を調べてみよう。「生」という字は草の生え出る形をしている。木を生じて土上に出つるに象る。種の形をし、種の発芽生成の象を示す字である。全て新しい生命のおこることをいう。

「生」を偏に持つ漢字を調べると、「生きる」という、意味の入っている字がかなり存在している。その用法は次のようである。

草木が地上に生じてきた様に象る一生える

生まれるのを意味の系列のものに女性・性など

青く澄み切る意味を共有し、「晴」、「清」、「精」の要素になった

昔の「生」の字はどういった形をしていたのかも面白い点であると思う。

２．２　「住む」

住−　人＋主であり、「主」の上の部分にある点は、一カ所にじっとたつ灯火を示す。そして「主」の字は、この光りの下に燭台を描いた様で、定立して動かない意を含む。

２．３　「暮らす」

暮−　幕＋日であり、草原のくさむらに太陽が没する様。

３．グループ動詞の相違点

では、このグループの動詞は「生活する」という意味合いでどれだけ一致するのか、してないのかを見てみよう。

普段「生きる」動詞を「生活する」という意味で使う場合は物事を実質的以上に誇張している意味合いが入っている。

・毎日静かに生きていた。

・留学している間にその国の言葉を使って生きる。

経済的な意味の入っている文章ならば、「生きる」の反対語である「死ぬ」という意味も入っていて、そのお金でぎりぎり生活していて、死ぬ状態に近いという意味である。

・昔の人は山の斜面に生きてきた。

という言い方には、まず、生き延びるために苦労しながら、大変な生活をしていたという意味である。ここで注意してもらいたいところは、「生活する」という言い方には生活が大変であるという意味が入っていることである。「生活する」という意味の「生きる」動詞はやはり文語的な表現である。

・彼は生まれながら東京に生きている。

「生きる」に「に」格助詞を加えると、「暮らす」の意を帯びてくる。本にしか出ない表現だろう。

・パンダは中国に生きている。

というと、対象、パンダは擬人化され、なかなか文語的なことになる。

・四万円で生きる。

といった表現にはそういう意味合いが強い。しかも、

・四万円で暮らす

というならば、元々用法に経済的な営みを行うといった意味が入っているので、自然で、よく使う文章になる。

・給料だけで暮らす。

という表現の意味合いは、置き換える場合の「生きる」動詞とニュアンスが違う。「暮らす」

の場合、普通の生活ができるというのであって、「生きる」の場合、最低限の生活の水準をイメージする言い方である。「暮らす」はゆとりのある生活のことを示しているのだが、「生きる」は生活するだけで精一杯といった言い方である。

ここは、「生活する」という意味の「住む」動詞を置き換えが不可能である。

・四万円で住む。(−)

・給料だけで住む。(−)

「住む」とは、「居所を定めて、そこで生活する」[岩波国語辞典第五版]　という意味であるので、経済的な意味合いはなく、社会的な意味合いを持っている。だから、上記の言い方ができないことが動詞の用法、意味合いを証明している。

先に述べた通り、「生きる」に「に」格助詞を加えると、「暮らす」の意を帯びてくる。暮らす動詞は「で」格助詞と使われるのが基本としては決まっている。「住む」の場合は、「に」格助詞で示されるのが基本である。(類似表現の使い分けと指導法　佐治・福島　１９９８年　p. 123)

・西条で暮らす。

・西条に住む。

とどちらも使えるが、ニュアンスに違いがある。「西条で暮らしている」には一時的な動作性が入っている。この、「暮らす」動詞の用法に注意しなければならない点として、短い時間にこの動詞が使えないという点がある。(月日をすごしてゆく。転じて、生活する。生計を立てる。日が暮れるまでの時間をすごす。[岩波国語辞典第五版]) 一日未満の場合は、「過ごす」動詞を使うべきである。

「で」格助詞は基本的に「暮らす」の前に出てくるのがほとんどの場合であるが、「に」を使うこともある。「で」を使う場合は、場所を強調したい時である。「に」の使う場合は、空間の意味や心理的な要素を伴う時である。

・父は東京で暮らしている。

・俺は東京に暮らすことが多かった。

1　父は田舎に暮らしている。

2　父は田舎で暮らしている。

ということは、例の１の場合、暮らす動詞自体がメインであるが、例の２の場合、「田舎」が中心である。「田舎」に合わせた生活をするという意味合いである。

先に述べたように「住む」は定められたところで「生活する」という意味を持ち、次の文章を見ると、その用法がよく分かると思う。

A 百歳まで住んでいた。

B 百歳まで生きていた。

「住む」がやはり場所のことを示す動詞であると納得できる。どこで百歳まで生きていたのか分からないのだが、一応どこかの住まいで生きていたということである。百歳まで生きていたと言えば、寿命は百歳だったという意味である。

「暮らす」は時間を過ごして、生活するという意味を持ち、連続性の意味合いは入ってない動詞である。

A 幸せに生きる。

B 幸せに暮らす。

B の場合は、動作の連続性があり、一生幸せな日々を送るということである。A の文章は今のことを示す。

A 夢に暮らす。

B 夢に生きる。

B と言えば、事実から離れた、自分が作った世界にいるということであるが、A と言えば、夢といったことに向かって、実現させるように努力するという意味を持つ。したがって着実性の意味合いもかなり強くなる。

結び

「生活する」という用法では「生きる」動詞は文語的なニュアンスを持っていて、もう一つの用法「生存する」という用法に近い意味合いになる。

「住む」は、場所の要素が重要であり、「暮らす」と違い、その営みは個人的なものではなく社会的である。

「暮らす」の場合は、経済的な要素が中心であり、それに「時間を過ごして生活する」という意味合いが強い。動作の連続性を示す動詞であるが「生きる」よりは短い。

ロシア語においては「生きる」動詞の大体の用法は「生存する」はもちろん、「住む」、「暮らす」の意味合いも持っている。定められた場所を表すのに「生きる」ーzhit 動詞は接頭詞が付け加えてきた、prozhivat になる。

死なないですむという意味の「生きる」はロシア語の vizhivat になる。言根は変わらないが聞こえは違ってくる。日本語の「西条に生きる」に当たるロシア語の zhit v Saijo になる。意味的には全く一緒でありつつ、日本語の「西条に住んでいる」に当たるロシア語

の prozhivvat　v　Saijo、居場所を強調していることを含まれ、同じ意味合いを持っている。　同じく経済的な営みを表している「住む」みたいに pprozhivat　動詞が使わない。基本的な「生きる」の zhit が使われる。

「生活する」グループ動詞に関連する資料やいろいろ参考にしてきたのだが、類語という莫大な内容には完全には届いていないとつくづく感じる。

言葉の学習はもちろん、言葉の細かいところは理解するのに長い時間を要する。類義語も同様である。今回は類語に関するテーマを選んで、「生活する」に類する動詞のグループをめぐってレポートにしたのだが、他にも類語のことも調べてみたことがある。しかも調べたにもかかわらず、使い分けを失敗してしまったこともあった。

日本語を自国で教科書だけで勉強している日本語学者にとってはこのような類語の使い分けは自然な日本語が使われる環境にいないとなかなか身に付けられないだろう。

参考文献

基本日本語−意味と使い方　角川辞典−川書店　森田良行　昭和５４年　p.６２−６４

新明解　国語辞典　第一版　昭和　４８年

新明解　国語辞典　第四刷

新明解　国語辞典　第五刷

大きな活字の国語辞典　第三版　三省堂　１９８２年

A dictionary　of　basic Japanese　基本日本語辞典　角川書店　森田良行　平成１０年　p.１１２−１１３

The　Great　Japanese　Dictionary 日本語大辞典　第二版　講談社　梅竿忠夫　金田一晴彦　他　１９９５年　p.１０７

類語大辞典　　柴田武　　山田進編　講談社　２００２年

類義語使い分け辞典　日本語類似表現のニュアンスの違いを例証する　田忠魁　泉原省二　金相順　研究社　１９９８年

和露辞典　藤沼貫　研究社　２０００年

露和辞典　東郷正延、他　研究社　２００１年

類似表現の使い分けと指導法　佐治佳三監修　福島奉正　１９９８年

ことばの意味　辞書に書いてないこと　柴田武　他 平凡社　１９８２年